

戦争に関する資料館の展示方法の工夫
—長崎原爆資料館と広島平和記念資料館の事例を中心に—

26AR087 肥田 菜々子



目次

1. 目的地
2. 研究旅行の目的
3. 期待される効果

4. 研究旅行日程表
5. 長崎原爆資料館における展示方法の工夫
6. 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館における展示方法の工夫
7. 広島平和記念資料館における展示方法の工夫
8. 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館における展示方法の工夫
9. おわりに

1. 目的地

日本 長崎県、広島県

2. 研究旅行の目的

この研究旅行の目的は、日本ではどのような手段で、そしてどのような考え方に基づいて「戦争」を伝えてきたのかを調査することである。広島平和記念資料館や長崎原爆資料館など専門施設を訪問し、資料のレイアウトや展示内容を分析することにより、卒論のテーマである共感共苦（他者の苦しみを自分の苦しみとして体感し考える力）が資料館の中でどのように活かされているのか調べる。そしてこれらの資料館の展示方法の類似点などを分析し、資料館側が閲覧者に展示物に対してどのようなイメージを持たせたいのかを考察する。

卒論で児童文学における戦争の伝え方について論じるため、現在行われている戦争体験の継承法や今までの戦争の伝え方などの基礎知識を学ぶことが、今回の研究旅行奨励制度の目的である。

3. 期待される効果

- ①広島平和記念資料館や長崎原爆資料館などの専門施設は、戦争に関する基礎知識を学ぶとともに、資料の解説やレイアウトから企画者が戦争に対しどのような認識を持ち、何に重点を置いて伝えているのか、現代日本の戦争に対する価値観を探ることが出来る。
- ②展示物や館内のレイアウトの中に、どのような共感共苦の力を育む工夫があるか調査することが出来る。
- ③資料館側の共感共苦の力を生み出す工夫に対して、閲覧者がどのような反応を示しているか実際に見ることが出来る。

もちろん、研究旅行を行わなくても、資料やパンフレットなどから、展示する側の意図を考察することも可能である。しかし、実際に現地を訪問し展示物を自身の目で見ることによって、自分の中にどのような感情が生まれるのか、また他の来館者たちはどのような反応を示しているのか、そうした点を考察する際に、研究旅行による実地調査は最も有効な方法と言える。特に、私の卒業論文のテーマである戦争児童文学の対象者である子どもたちが、展示物に対してどのような反応を示しているかは特に注目したいポイントである。また、資料

館内の展示物を細かく調査し、資料館から感じるイメージが伝わるような研究旅行報告書をまとめることで、この報告書を読んだ皆さんに対して、「戦争」という巨大な問題を改めて考える機会を提供することができればと祈念している。

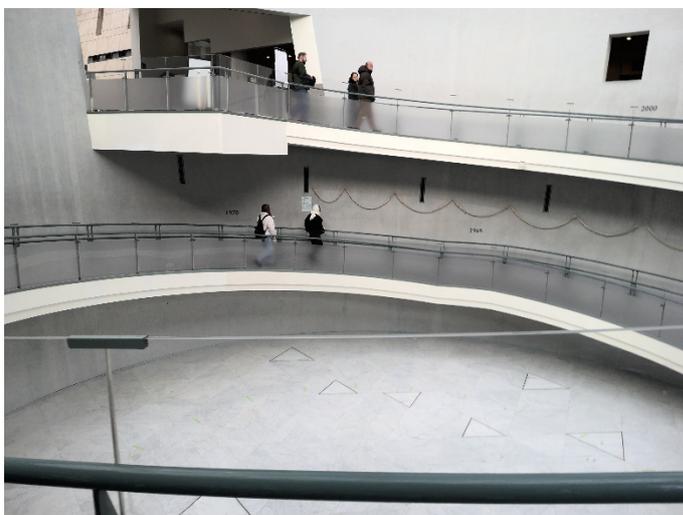
4. 研究旅行日程

	滞在地	行動・調査内容
第一日目	福岡→長崎	移動、長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館観覧
第二日目	長崎→広島	移動、平和記念公園訪問
第三日目	広島→福岡	広島平和記念資料館・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館観覧、移動

5. 長崎原爆資料館における展示方法の工夫

長崎原爆資料館における展示の工夫点を、実際に私が巡った展示室順に述べる。

(1) 展示室へ続くスロープ



展示室へと向かう円形スロープに沿った壁には、2000年から始まって1995、1990と5年刻みの数字が表示されている。スロープの最後に1945が来て、その地点が展示室の入り口となる。現代から始まり、展示室へと向かいながら年月を遡ることによって、観覧者が原爆の投下されたときにタイムスリップしたような心地にさせる工夫である。

(2) 1945年8月9日についての展示



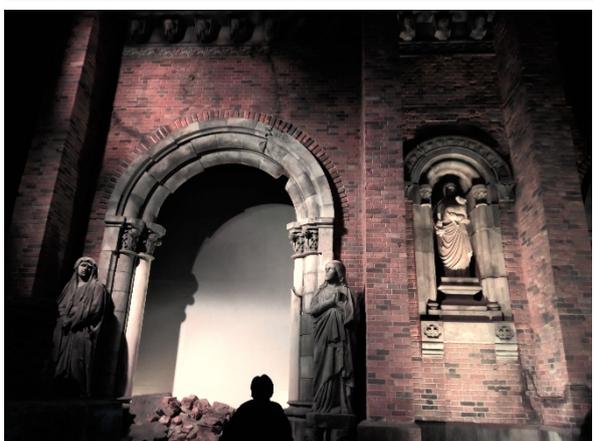
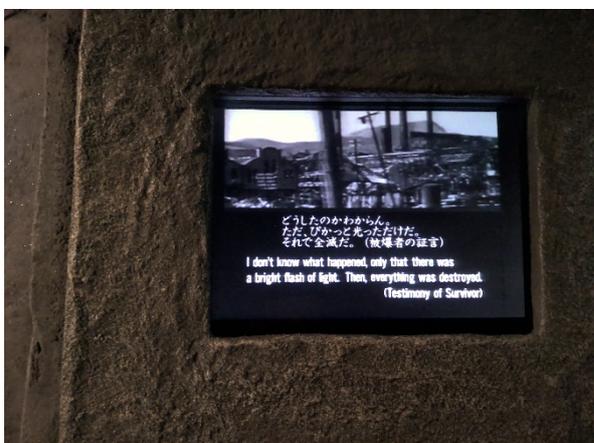
最初の展示室の入り口には、日本語や英語、中国語など11か国語で書かれた「長崎を最後の被爆地に」というメッセージが飾られている。目の不自由な人に対してこのメッセージが伝わるように、近くには点字でこのメッセージが書かれた金属板も置かれてある。

展示室に入ると正面には、原爆が炸裂した瞬間である午前11時2分で針が止まった柱時計が掛けられている。この柱時計は爆心地から約800mの民家から発見されたものであり、爆風により歪んだ文字盤や外枠から、原爆がどれほどの威力だったのかを伺わせる。柱時計の隣には、「1945.8.9」「11:02am」という文言があり、観覧者に原爆が何時に投下されたかをハッキリと分かりやすい形で示している。

その隣の壁は、柱時計を取り囲むようにアーチ状になっており、被爆前の長崎の様子（浦山天主堂での堅信式、長崎駅前の商店、長崎駅など）を写した写真が貼られている。静止画だけではなく、二つのモニターを使い写真の映像を流していた。頭上からは時計のカチカチという音がスピーカーから流され、観覧者に「これからここに原爆が落ちるんだ」という予感と恐怖を体感させている。

この展示室の最後には、長崎に原爆が投下された際の映像が流されており、原爆投下前の活気のある長崎の展示を見せた後原爆投下の映像を見せることで、より戦争の悲惨さ・原爆の恐ろしさを観覧者に痛感させる工夫である。この展示室は比較的照明があり明るい、次に続く原爆による被爆の実相の展示室はかなり暗く、原爆が生み出した暗い記憶のイメージへと繋げている。

(3) 原爆による被爆の実相の展示



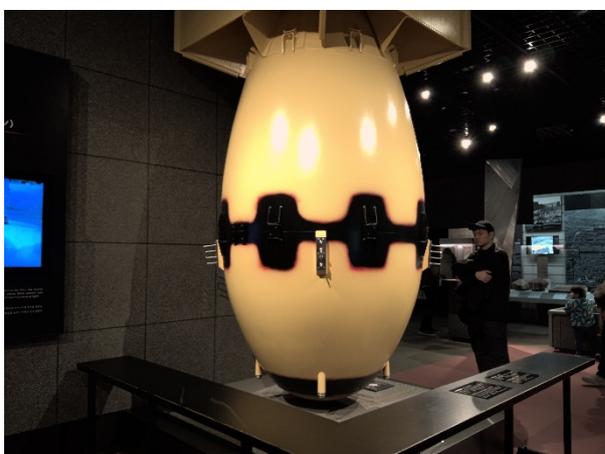
全体的にかなり薄暗く、展示物に当たるライト程度しか室内に照明がない状態である。前室との落差もあり、かなり重苦しい雰囲気となる。展示されているのは、高熱により木の部分が炭化した国民学校の遺壁や爆風により脚の曲がった給水タンクなど被爆した建築物などだ。これらの展示物には下から白いライトが当てられ、暗闇の中から展示物のみが浮かび上がるような仕掛けがなされている。展示物の下にはモニターが合計 11 箇所設置されており、そのモニターには原爆投下後の惨状やその光景を見た人々の証言の映像が映っていた。

この部屋の最後には、被爆した浦安天主堂の側壁の再現模型が展示されている。下にはモニターが二箇所設置されており、破壊された浦安天主堂の映像が流されている。マリア像には黄色のライトが当てられ、微かに讃美歌のような音楽が聞こえた。

(4) 原子爆弾の解説についての展示



原子爆弾についての展示室に入ると、先ほどの展示室とは異なり一気に明るくなる。入口近くの壁には、1943年から長崎原爆投下までの過程が解説されている。原爆投下までの歴史や原爆投下予定地が示された日本地図、原子爆弾やキノコ雲の写真、米軍機が投下したピラなどが展示されていた。



原爆による熱線、爆風、放射線の地理的な広がりや状況を説明するため、プロジェクションマッピング技術を活用した映像をジオラマ模型の上に映す展示があった。下には三つの解説モニターがあり、そのうちのひとつには英語字幕がついていた。

長崎に投下された原子爆弾の実物大模型もあり、壁面のモニターでは米軍が原爆を組み立て、B29に搭載する様子を撮影した映像が流されている。



原子爆弾によって発生した熱線による被害の検証もある。アメリカでの原爆実験によるケロイド被害者の映像の隣には、熱線の影響により表面が沸騰して泡立った被爆瓦などが展示されている。このほかにも火災による被害の検証や、爆風による被害の検証が行われていた。

(5) 被爆物の展示



長崎原爆資料館で一番多かった展示は、原爆による物的被害の展示だ。溶けて繋がったガラス瓶やはしごと監視員の影が焼き付いた板壁など数多くの展示物が並んでいる。その中には溶けたガラス瓶や被爆した橋の橋名板に実際に触ることが出来る展示がなされ、熱によって変形した形や表面が泡状に浮かび上がった様子を自身の手で確かめることが出来る。

(6) 救援・救護活動の展示



原爆による甚大な被害を受けた後、救護隊が全国から派遣された。その際使用された炊き出し用の大釜や救護ベッドが展示されている。また近くには、自らも被爆しながらも被爆者の治療に当たった永井隆博士が取り上げられ、彼の解説とともに彼が生前使っていたロザリオが展示されている。

(7) 被爆者の訴えの展示



被爆者の証言が映像となって記録されている。映す映像はタッチパネルで選択でき、全てのものに英語字幕がついている。証言ビデオには、被爆者の手記が3本、日本人被爆者の証言が28本、外国人被爆者の証言が9本収録されている。外国人の証言の中には、原爆を是としているものも含んでいた。他にも被爆者が描いた絵、爆死証明書などが展示されている。

(8) 核兵器のない未来に関する展示



最後の展示は原爆後の世界の動きを核縮小・拡散の流れを絡めながら解説している。まず日清戦争や太平洋戦争など日本が関わった戦争の歴史が解説されている。関東軍やファシズムの形成などキーワードの説明を行うモニターの前には椅子が置かれており、ゆっくりと解説を見ることが出来る。

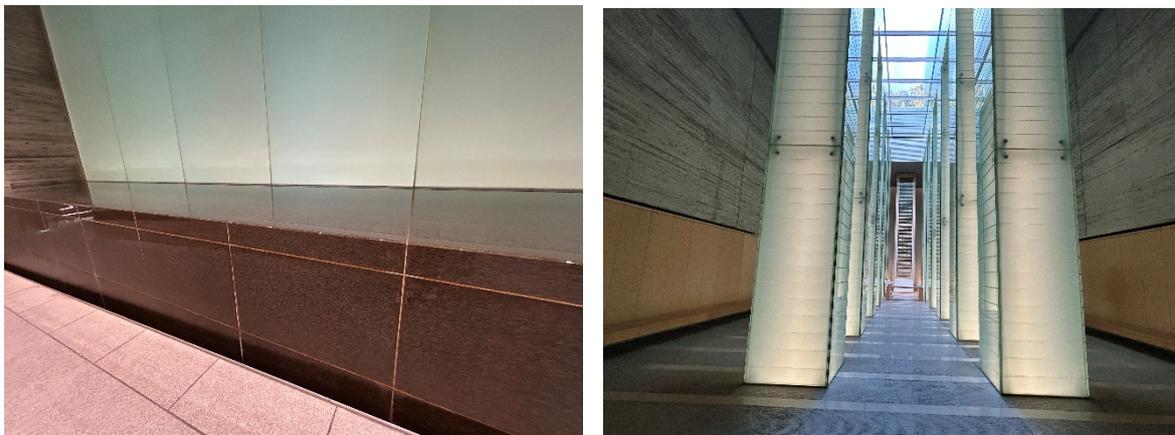


また原子爆弾開発から原爆投下までの世界的な道のり、原爆投下に関わった人々が解説された逆ピラミッド型のモニュメントがあり、それらは歴史的転機となった箇所がライトで光るようになっていた。



日本への原爆投下後の核実験についても詳しく解説されており、核兵器の歴史が壁一面に展示されている。世界地図に世界各国がどのくらい核兵器を所持しているかが示されているモニュメントもあり、年齢層が低い世代にも視覚的にわかりやすい形になっている。また地図の上に人型の像を立て、そこでビキニ環礁など核兵器開発・実験の被害者の解説を行うなど、原爆後の核兵器についての展示もかなり力が入られている。

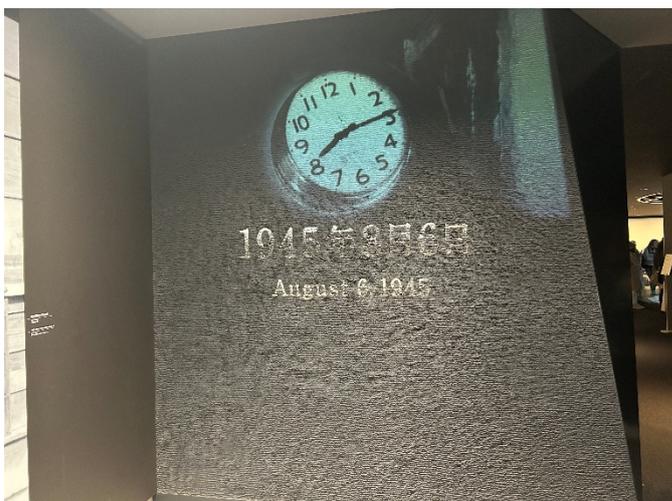
6. 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館における展示方法の工夫



国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館は、原爆によって亡くなった被爆者の追悼と永遠の平和を祈念するために開館されたものである。多くの被爆者が水を求めたことから、追悼平和祈念館には地上部に一つ、館内五つの水盤があり、中には滝が設置されている。左側の写真は館内の水盤の一つだ。被爆者の遺影や手記の閲覧室も備えられており、情報を得ることも出来る。心を落ち着けるため、追悼室に入る前には追悼空間前室があり、登録された死没者の氏名と写真をモニターに映し出している。この部屋にも水瓶が設置されている。追悼空間では、ガラスでできた柱がライトで薄明るく照らされており、静謐な印象を受ける。右の写真奥に見えるのが原爆死没者名簿を納めた名簿棚であり、名簿には死没者の氏名を記したものの他、名前がわからない死没者のための白紙のものもある。また、広島で被爆した被爆者の氏名を記載した名簿も一冊納められている。

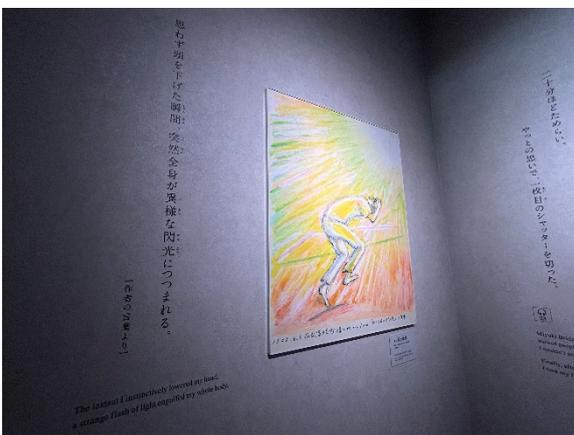
7. 広島平和記念資料館における展示方法の工夫

(1) 被爆前の広島の展示



資料館の入り口には、広島に原子爆弾が投下された時刻が刻まれた時計がプロジェクションマッピングで壁に投影されている。原爆投下の日付が壁には刻印されており、「いつ」「何時に」原爆が投下されたか観覧者にわかりやすくなっている。また、隣の壁には被爆前の広島の写真が貼られている。

(2) 被爆後の広島の展示



被爆後の広島展示室の入り口には、アーチ状になった壁に破壊された広島の写真が貼られている。

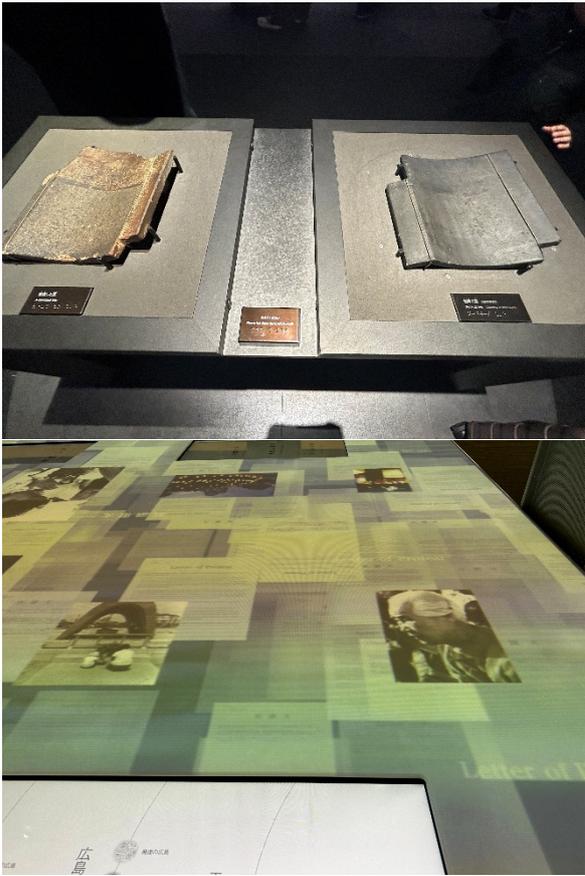
長崎と同じように原爆の威力を解説するプロジェクションマッピングが設置されているが、長崎と異なり詳しい音声会話は無かった。

室内は比較的暗く、展示物にライトを当てることで展示物を目立たせている。展示物との距離が近く、じっくりと眺めることができる。展示物は被爆した子どもたちの焼けた服や被爆して亡くなる前に使用していた自転車などがある。ものによるが、飾られている展示物のビフォーアフターがあり、原爆の破壊力を比較して感じることが出来る。長崎の資料館と異なり、モニターなど映像資料は比較的少ないが、被爆者が描いた絵などが多数展示されており、その横には被爆者の証言が載せられている。

(3) 原爆で壊れた被爆者についての展示

被爆を生き延びた人にスポットが当たっていたことも、広島平和記念資料館の特徴だ。被爆しながらも懸命に生きた被爆者の家族写真や夫婦の写真の横に解説文や寄贈者の証言が載せられている。前向きなものだけではなく、「原爆孤老」（原爆により家族を失い、孤独死した老人たちのこと）や、原爆小頭症に苦しむ家族、「N家の崩壊」と題した原爆で体に障害が残った父を支えながらも経済的に困窮し崩壊していく家族など、様々な人々の生涯を写真パネルで紹介している。また、外国人の被爆者についても紹介している。

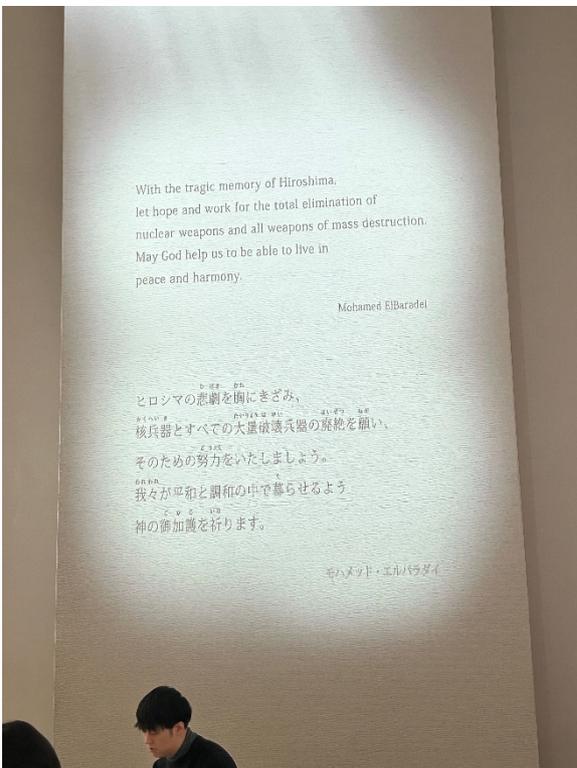
(4) 核兵器のない未来についての展示



展示室の最後には、世界全体の核兵器の歴史とその威力の解説などが複数のパネルで解説されていた。原爆の威力をわかりやすくするために被爆する前の瓦と被爆した後の瓦を対比できるように隣に展示している。この展示には溶けたガラス瓶や原爆ドームの模型もビフォーアフターで比べられるようになっており、実際に触れて異なる感触を確かめることも出来る。

核兵器廃絶に向けての動きはテーブルに埋め込まれているモニターで調べることができ、白く大きなテーブルには被爆者の写真や人影、世界地図を背景に核の写真が重ねられているものがプロジェクションマッピングされている。

展示の最後には、壁に広島原爆投下を受けての著名人の言葉が白い壁にプロジェクションマッピングされている。言葉の種類は数え切れてはいないが、少なくとも30以上は確認することが出来た。



8. 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館における展示方法の工夫



国立広島原爆死没者追悼平和祈念館は原爆死没者の犠牲を銘記し追悼の意を示す場所であり、原爆の惨禍を世界の人々に伝えるための場所である。円柱が地下に沈むような形になっており、地上部には原爆投下時刻である「8時15分」を示すモニュメントがある。その周囲には水を求めて亡くなった被爆者の弔いのため、噴水が設置されている。



中には原爆の被害について伝える企画展示室や体験記閲覧室がある。体験記は英語、中国語、韓国語など複数の言語でも閲覧できる。追悼空間に向かう道筋はスロープとなっており、時計の針と逆回りに下ることによって、観覧者に被爆直後の広島へと時間を遡るような感覚を植え付ける。スロープの壁面には、原爆投下に至る経緯や被害の概要がパネルで解説されている。



遺影コーナーでは原爆死没者の氏名と写真がモニターで公開されており、横にある検索装置で一人一人の写真を検索することが出来る。

追悼空間の壁面には、爆心地付近から見た被爆後の街並みを死没者数と同数のタイルを用いて表現していた。その下には被爆当時の広島市の町名が表示されている。また、追悼空間の中央にも、水が湧き出るモニュメントが設置されていた。

9. おわりに

三日間で長崎・広島資料館等を巡ったが、その展示方法の工夫にいくつかの共通点を発見することが出来た。その共通点は①観覧者の五感に訴える、②時間、③水の使用である。

①の工夫は溶けたガラス瓶に触れる展示やプロジェクションマッピングなどだ。資料館に展示されている内容は他人の体験であり、自身の経験として深く受け止めることは難しい。しかし、被爆の実態を手で触り、光や音を通じて感じることによって、自身のこととして受け入れやすくなる。

②の工夫は展示室入口に必ず展示されている時計や入口へと向かうスロープなどだ。これらは観覧者に現代から被爆直後の長崎、広島へと向かっていると思わせる工夫である。現代の安全な場所から眺めているのではなく、被爆直後の場所で原爆という危険に晒されていると感じさせることで、観覧者の中に恐怖と当事者意識が生まれる。

③の工夫は追悼平和祈念館などでの水を使ったモニュメントだ。原爆の熱線に晒された被爆者たちが水を求め苦しんだことを観覧者に端的に示すことができ、長崎・広島どちらでもこの工夫は見られた。本報告書の表紙に掲載した広島平和記念公園にある噴水「祈りの泉」も被爆者の追悼のために設置されたものであり、水というモチーフは原爆の恐ろしさや平和への祈念を示す上で大切な象徴なのである。

これらの工夫の狙いは、全て「観覧者に当事者意識を持たせること」である。資料館の展示物をただ眺めるだけではなく、被爆者の経験を自らのものとしながら後世に伝えていこうとする思いを、各資料館は訪問者の心に生み出そうと試みている。まさしく共感共苦の力を育もうとしているのである。

また、今回の研究旅行では、戦争児童文学の対象者である子どもたちの反応も実際に見ることが出来た。長崎原爆資料館では、展示されている絵を眺める二人の少女の反応を見ることが出来た。彼女らが見ていた絵は、原爆の熱線で顔を焼かれ赤く爛れた男性の絵であった。顔が赤くなっていることを漫画的な怒りの表現と思ったのか、一人の少女が「あの人怒っている」と言った。そのことに対して、もう一人の少女が「怒ってないよ」と答えたものの、彼女も何故顔が赤く塗られているのか説明することは出来なかった。そのまま二人は絵の前に立ってからももの数分でどこかへ行ってしまった。広島平和記念資料館では、展示物の側にあるベンチに座ってスマホゲームをしている外国人の少年がいた。

それぞれの資料館で見かけることが出来た子どもたちは、「親に連れてこられて」「仕方なく」来ている子どもたちが多かったように思える。多くの子どもたちにとって、戦争という巨大で陰惨な事柄を正面から受け止めることは難しい。そのため、未来を作る世代である子どもたちに戦争という記憶を受け継がせるために戦争児童文学は誕生した。しかし、戦争の惨禍をそのまま文章で表現しても、子どもたちにとって受け取りがたいものであることは変わらない。たしかに、資料館では戦争に関心を持たない子どもたちの姿も見かけられた。しかし、各資料館が行っていた「当事者意識を持たせる」ための試みは、卒業論文で戦争児童文学を考える際に、重要なヒントになると考えられる。戦争に関して興味を持っていない子どもたちに対して、どのようにすれば忌避感なく戦争を伝えられるかを考察するための礎と

して、本研究旅行は非常に貴重な体験になった。

参考文献

長崎平和推進協会『長崎原爆資料館 資料館見学・被爆地めぐり「平和学習」の手引書』（昭和堂、2021年）

広島平和文化センター『広島平和記念資料館 展示ガイドブック』（中本本店、2019年）

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館パンフレット

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館パンフレット